

平成30年 4月12日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16868

研究課題名(和文) 墓からみた先商文化の社会構造研究

研究課題名(英文) A study on the social structure of Xianshang culture seen from burial system

研究代表者

久保田 慎二 (KUBOTA, SHINJI)

金沢大学・国際文化資源学研究中心・特任助教

研究者番号：00609901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、先商文化とされる下七垣文化の社会構造を明らかにし、殷文化がいかなる社会構造を背景に夏王朝とされる二里頭文化と交替したのが解明する。下七垣文化に属する劉荘遺跡を分析した結果、副葬土器点数・葬具・構造は墓の規模と相関し、集団内に階層差が存在したことを指摘した。ただし突出した地位の不在や階層表示システムの未整備より、階層化社会の萌芽段階と捉えた。その後、酒器による階層表示など、二里頭文化の影響を受容しながら殷文化の葬制が形成されていく。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the social structure of Xiaqiyan culture(Xianshang culture) in order to elucidate the process of changing from Erlitou culture to Shang culture.

The analysis results of Liuzhuang site suggest that There is a strong correlation between grave scale, burial pottery, coffin and structure. Therefore, it means that there was social hierarchy in the Liuzhuang group. However, because of the non-existence of high hierarchy and the undeveloped hierarchical system, the author also identifies Xiaqiyan culture is still in the early stage of hierarchical society. In the process of changing from Xiaqiyan culture to Erligang culture, Shang culture was strongly affected by Erlitou culture, and formed Shang burial system gradually.

研究分野：中国考古学

キーワード：下七垣文化 二里頭文化 夏王朝 殷王朝 社会構造 先商文化

1. 研究開始当初の背景

現在の中国考古学界では、いわゆる古典籍上の夏王朝に比定される二里頭文化の成立をもって初期国家の萌芽とされる。そして、この初期国家たる二里頭文化がいかなる過程を経て成立したのかという問題は、長らく議論されてきた。その結果、現在では二里頭文化の成立過程やその社会構造について、一定の研究の蓄積がみられるようになった。

一方、二里頭文化に後続する時期には、殷王朝に比定される考古学文化の前半期とされる二里岡文化、さらに後半期とされる殷墟文化が成立する。これらの殷文化は二里頭文化を凌駕する大規模な城壁や高度に発達した青銅器、巨大な墓や重層的な遺跡間関係など、確実に社会の複雑化が進展し、本格的な初期国家へ踏み出したとされている。そして、その社会構造についても、殷墟文化を中心に考古学や甲骨文から多くの研究が蓄積されてきた。このように中国新石器時代から二里頭文化、そして殷文化へと次第に社会が複雑化し、初期国家へと至る大まかな流れはゆるぎない事実と認識されている。

しかし、二里頭文化と殷文化の関係について、これまで議論されてこなかった重要な問題が残されている。つまり殷文化が二里頭文化と交替する際の社会構造である。夏王朝と殷王朝の関係について、単線的に前者から後者へと交替したのではなく、夏王朝と併存して殷王朝の前身である先商文化、つまり考古学文化としての下七垣文化が存在したことは鄒衡などが論じている〔鄒衡 1980〕。そしてこの下七垣文化が夏王朝たる二里頭文化を滅ぼして殷王朝へ交替したと考えるのが一般となっている。そうならば二里頭文化を滅ぼすに至る下七垣文化の集団的・物質的な力を担保する成熟した社会構造が存在したはずである。しかしこれまでは資料の制約もあり、下七垣文化の社会構造について考古学的な研究は全く行われなかったのである。

2. 研究の目的

本研究は、上記の背景を鑑み、下七垣文化の社会構造を明らかにすることで、殷文化がいかなる社会構造を背景に二里頭文化と交替したのかを明らかにし、さらに新石器時代から殷文化に至る社会構造の発展段階を描出することを目的とする(図1)。

この目的を達成するために対象とする遺跡は、2012年に発掘報告書が刊行された、河南省鶴壁市に所在する劉荘遺跡とする。劉荘遺跡では墓地全体を発掘しており、338基の下七垣文化の墓が調査され、土器や人骨が多く出土している〔河南省文物局 2012〕。墓は生前の社会的な地位や役割が反映されや

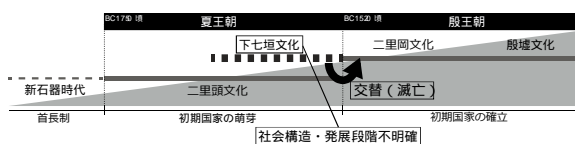


図1 本研究の概要

すく、考古学から社会構造に迫る格好の資料である。また二里頭文化や殷文化の社会構造も墓から分析した研究が多く、それらと対比できるという点でも優れた資料である。

3. 研究の方法

まず、先学の研究を検討することで下七垣文化の年代観を整理する。その上で、劉荘遺跡出土の土器編年を構築し、墓地の時間的変遷を明らかにする。そしてその時間軸に沿って、墓の規模や構造、副葬品から読み取れる階層性及び墓の分布から読み取れる集団がいかに変化したのかを明らかにする。これにより劉荘遺跡の墓地がどのような集団から構成され、さらにそれぞれの集団における階層性の具体的様相を把握できる。また集団間における墓の属性や出土遺物の比較を通し、集団レベルにおける階層差の有無についても明らかにできる。さらに劉荘遺跡の墓は切り合いや重複関係が極めて少なく、整然と列をなして墓地を構成する。この列の並びと列内における被葬者の性差や墓の規模別分布より、列内や列間の墓の関係をある程度想定する。

次に、当初の計画では出土人骨の歯冠計測を行うことで、上記した考古学的な分析から想定した墓の関係をより具体的な親族構造の問題に置き換える予定であった。しかし、本研究開始後における現地状況の変化により、集団構造の分析について考古学を主としたアプローチに変更した。具体的には被葬者の年齢や性別と大型墓の分布をはじめとする階層性を示す情報を重ね合わせる。この方法については、不測の事態に備えて申請段階から準備しておいた方法である。これらの分析を通して集団構造を解明し、さらに考古学的分析から明らかにした階層構造とあわせて考察することで、劉荘遺跡から下七垣文化の社会構造を復元する。

最終的には、以上から得た結果を新石器時代から二里頭文化の社会構造に関する先学の研究と照らし合わせ、中国の社会構造の変遷および二里頭文化に対する下七垣文化の社会構造の相対的な位置付けを明らかにする。

4. 研究成果

まず、これまでの研究史を整理することで、下七垣文化の年代観を検討した。その結果、下七垣文化の上限および下限年代における見解の不一致という、極めて大きな問題が存在することが明らかとなった。その最大の要因は、放射性炭素年代測定法による絶対年代の不足にあると考える。現状において、絶対年代が公表された遺跡は葛家荘遺跡の1点のみであり、年代を確定するにはあまりにも不十分である。

下七垣文化の絶対年代、特に下限については極めて重要な問題に関わる。夏王朝から殷王朝への交替、つまり二里頭文化から二里岡

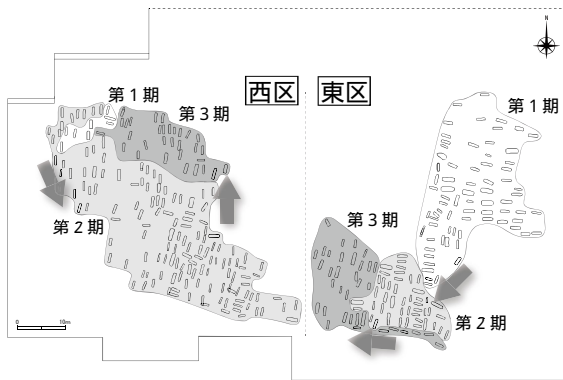


図2 劉莊遺跡における墓の分布と変遷

文化への移行に際して、いつから下七垣文化が二里頭文化と関係を持ち始めたのかを明らかにする際、その基礎作業として両文化の併行関係を明らかにしなければならない。その併行関係を明らかにする際の重要な根拠が絶対年代なのである。報告者はこの問題を検討するため、下七垣文化の中期から後期に相当すると考える安陽鄭鄧遺跡において、後期段階の器形を呈する鬲の付着炭化物のサンプリングを行った。年代データはまだ出てきていないが、絶対年代が明らかになり次第、本研究の中に組み込む予定である。現状における考古学的分析を通じた報告者の見解としては、下七垣文化の下限は二里頭文化の下限と大きく離れないと考えており、この年代観のもとで研究を進めた。

次に行ったのは、土器分析による劉莊遺跡の時期区分である。墓に副葬される鬲・豆・盆を分析対象とし、その型式組列を組むことで墓の年代を明らかにした。そして、墓の切り合い関係を加味し、劉莊遺跡が3時期に渡って形成されたことを明らかにした。さらに、それぞれ東西に分かれて墓地が拡大することから、2つの集団から構成されていると考えた(図2)。

次に、これら2集団内における階層構造について検討を行った。墓の規模が投下した労働量と比例し、社会階層を反映するという前提のもと、規模と副葬土器点数・葬具・構造・非日常的副葬品の相関関係を確認することで、階層化の有無やその質について分析を行った。その結果、副葬土器点数・葬具・構造については墓の規模と明確な相関関係があることが確認でき、集団内には階層差が存在したことを明らかにした。

さらに詳しくみると、第2期以降に副葬土器点数やその組成も整ってきており、階層格差が拡大・整備される傾向を見て取ることができる。特に副葬土器組成については、鬲を中心として豆・盆がそれに加えられる形で副葬されるようになる。この鬲・豆・盆の煮沸・供膳器の副葬は、後続する殷文化前半の二里岡文化で一般化する墓制である。つまり、劉莊遺跡第2期を前後する時期から、殷文化で普遍化する墓制の一要素が形成され始めた可能性が高い。土器の副葬以外にも、南北軸

をとる墓の埋葬方向についても、当該時期から開始されており、これものちの二里岡文化へとつながる可能性が高い。

このように、第2期を画期として、次第に殷文化の要素が出現し、また階層構造も整ってきたものと考えられる。しかし、二里岡文化などと異なる点として、酒器をはじめとする非日常的副葬品が大型墓から出土しない状況がある。酒器とされる爵や鬶などと墓の規模が相関しないのである。同時期の周辺をみると、二里頭文化はこれら酒器に階層表示機能を付加し、階層上位墓にのみ副葬する葬制を採用している。また、後続の二里岡文化についても同様の傾向を抽出できる。つまり、酒器の階層上位墓への副葬という習慣は、下七垣文化が二里岡文化へと移行する際に、二里頭文化から受容した要素であったとみなすことができる。逆に考えると、下七垣文化段階では特定の遺物に階層表示機能を与えるのではなく、あくまでも副葬品の「量」や「組成」で階層差を示したと考えた。

さらに1点付け加えておきたいのは、劉莊遺跡における階層上位墓には、男女の性差がない点である。これは新石器時代以降、次第に父系の階層社会へと向かうとされる既存の研究に、疑問を投げかけざるを得ない結果となった。

次に、集団構造についてであるが、既述のように劉莊遺跡は2集団から構成されることが分かる。この集団間の格差をみると、明らかに東区の集団に階層上位を示す要素が集中しており、東区集団が集落の主導的な地位にあったと想定した。階層上位墓の分布状況をもみても、東西の出自を同じくする集団内の家族あるいは世代単位で分散し、このような階層上位者を常に輩出した東区がより優位な社会であったと考えた。ただし、突出した地位の不在や階層表示システムの未整備からは成熟した階層化社会を把握できず、あくまでもその萌芽段階に位置付けられると考えた。

さらに下七垣文化に属する孟莊遺跡や南城遺跡の分析から、劉莊遺跡の社会構造が下七垣文化全体の社会構造を反映する可能性を指摘した。その後、すでに指摘したように、このような下七垣文化の社会構造は、階層表示という点でより先進的な同時代の二里頭文化から、酒器を中心とする非日常的副葬品の意味や青銅器の製作技術とその価値を主体的に受容し、在地で培った鬲を中心とする副葬習慣に新たな要素を付加していく。そして、その結果として後続する二里岡期以降における殷文化の葬制が成立していくのである。

引用文献

- 河南省文物局編著 2012『鶴壁劉莊』科学出版社
- 鄒衡 1980「試論夏文化」『夏商周考古学論文集』科学出版社、89-169頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

久保田 慎二、下七垣文化研究の現状と課題、大貫静夫先生退職記念論集、査読無、2018年、印刷中

久保田 慎二、小林 正史、宮田 佳樹、孫国平、王 永磊、中村 慎一、河姆渡文化における煮沸土器の使い分けと調理に関する学際的研究、中国考古学、査読有、第17号、2017年、pp.73-92

久保田 慎二、劉莊遺跡からみた下七垣文化の社会構造、東京大学考古学研究室研究紀要、査読無、第30号、2016年、pp.33-67

〔学会発表〕(計17件)

久保田 慎二、長江下流域の新石器時代における煮沸土器の利用とその変遷、日本中国考古学会関東部会 第189回例会、2018年

久保田 慎二、小林 正史、宮田 佳樹、劉斌、王 寧遠、陳 明輝、中村 慎一、良渚文化における煮沸器の使い分けに関する初歩的考察、日本中国考古学会2017年度大会、2017年

久保田 慎二・小林 正史・宮田 佳樹、煮るか炊くか 田螺山遺跡のコメ調理、第43回金沢大学考古学大会、2017年
宮田 佳樹・久保田 慎二・小林 正史、陶器脂質残留分析技術在考古学中的应用、華夏考古学術論壇 第四期、2017年

Shinji Kubota、A study on the formation process of Shang burial system: Focusing on Liuzhuang site in Xiaqiyuan culture、Copan: A Comparative Perspective、2017年

久保田 慎二、小林 正史、孫国平、王 永磊、中村 慎一、スス・コゲからみた河姆渡文化における煮沸器の使用痕研究、日本中国考古学会2016年度大会、2016年

久保田 慎二、從陶器看陝北地区考古文化与陶寺文化的關係、早期石城和文明化進程 中国陝西神木石峁遺址國際學術研討会、2016年

久保田 慎二、中国初期王朝時代における階層構造とその成立過程、金沢大学文化資源学フォーラム、2016年

久保田 慎二・中村 慎一、中国初期稲作文化の様相、第二回文化財・科学技術研究講演会「考古学と先端科学が明かす縄文文化と中国新石器文化」、2016年

久保田 慎二、中国新石器時代末期から初期王朝時代における権力の出現過程、早稲田大学総合人文科学研究センター主催シンポジウム『権力の誕生 儀礼・祭祀からみる古代文明形成の考古学的アプローチ』、2016年

〔図書〕(計1件)

久保田 慎二、六一書房、中国新石器時代の變遷と交流、2015年、222

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 慎二 (KUBOTA, Shinji)

金沢大学・国際文化資源学研究センター・特任助教

研究者番号：00609901